特242
941

0054731000

0054731-000

特２４２－９４１

房州の伝説

平山無石・著

米田屋書店

分冊１

昭和１０

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特242
941

房州の傳說

分冊(一)

特242
941

安房流浪すること四星霜、恒に昔ながらの山と海と人との三と相對す。求むる處多きにもあらず、辛じて口を糊せんが爲めの努力を敢てするのみ、況んや巨萬の富を夢み顯要の地位を冒さんとするか如き野心あるに非す。絶えず自然と人とに接近する所のものは、現在によつて過去を律し、人の口稗によつて過去の時代を想像し、人々の遺せる記錄によつて、その時代の人々の生活を究めんとするのみ、思ふに歴史の示す所に隨へば過去を措きて現在あることなく、現在を措きて過去ある事なし。

安房の地生活に易しと雖も士を遇するの道を知るもの稀なり、口を糊するの勞また難きかな、徒勞を敢てし孜々として寸暇を得る能はず、止むを得ず、睡眠の時間を削りて得たる所のものを蒐集す。錄するに當つても何等の形式あるなく何等の技巧をも施すの暇あるなし、口稗傳說をあるがまゝに寫して粗材のまゝ粗礦石のまゝに止めんとす、他日人を得てこの粗材粗礦石を巧みた利するものあらは、望外の至りとす。

昭和九年晩秋

船形町、西の寓所に於て

著者識

目次

まんぼうの吉五郎 …… 一
坂田の長ェム …… 三二
神隠しの神童 安西圓次 …… 三七

傳說

まんぼうの吉五郎

平山無石

時日は勿論判然しない。明治は廿年頃の秋の事であらう。暴風の後の靜けさとでも言はうか、靜穩とした空には雲一つなく、ソヨリとする風さへなくて、ヂリ〳〵照り付ける日差しには、ムッと蒸暑さを感ずるやうな午後である。船形村川名の縣道筋にある千日堂の切石を、徐かに登つて行く人々があつた。

人の數は八九人餘り——心持ち低い銅羅聲で何か切りと話してゐるが、時折ワッと爆發する笑聲の外は、何の話をしてゐるのかさつぱり聞取れない。

赫々と照る秋の陽は澄み切つた空から、ポツリと立つてゐるお堂の上へ、數限りない光の雨を降りそゝいで黄ばみかゝつた四邊の森も林も草も皆一樣にあえいでゐるかとさへ思はれる。その光りを避けるやうにまぶしさうな眼付をして、人々はドヤ〳〵と堂の中へ這入り込んで行つた。

『暑いのう』

ウム莫迦に蒸しアがるな』

斯う言つて、一人は鉢卷を取つて汗を拭いた。

この人々が漁師達であると云ふのは、その樣子でも頭の上へ載けてゐる鉢卷でも直ぐ判つて來る。

外で見た割にお堂の中は廣々としてゐて、疊も八疊ばかり敷いてある。正面段の上には煤けた如來尊の像が飾つてあつて、其兩側には心持ち長の低い地藏尊と觀音の像が置いてある。漆塗りの經机の上には敷物に納まつてゐる鉦と木魚とが兩端に載つかつてゐて、その蔭の方には金ピカの燭台やら金銀の蓮の花が立つてゐる。

机の中央には線香の灰が盛り上つてゐる香爐、使ひかけの線香が僅かばかり紅い包紙にくるまつて放り出してある。

這入つて來た人々は唐突好きな場所を見つけて崩れるやうに疊の上へ倒れたが、机の傍に寢そべつてゐた一人の男は見るともなしに、机の上に載つかつてゐる異樣な皮包に吸寄せられてムックリ起き上つて、引つたくるやうにそれを引寄せ、私かに包を解かふと焦つてゐた。

『留ーい、何か其處らで盜むんぢやねえぞ』

『ばかにするねえ、人が違はァ』

留が斯う言つた時分にはもう包は解けてゐた——開いた中からは、黑餡に包まつた甘しさうな團子が一山盛。

『ウワッ團子だッ！』

斯う留が頓狂な聲で叫んだ刹那、留の右手はグッと一握りの團子の塊を掴んで、口の中へ押し込んでゐた。

その聲で飛上つた人々は留の頰張つてゐるのを見て急に包の周圍へタカつて團子の引つたくり合ひをやつてゐたが見る間に平げて了つて餡の喰付いた皮だけが机の下の方に放り出されてゐた。

『留、ずるいぞ默つてゐやがつて、大きな塊をパクリやがつてな』と言つて恨み釜しい言葉を吐き出したのは分前が少かつた源七であつた。

『極つてるぢやあねえか、俺が見つけたんだぞ、幾らでも貰つたら不足は云ふなよ』

『チェ！　大きな事を云つてらァ』

源七も元の座へ歸つて行つた。

人々は足を投げ出したり、横になつたり、仰向になつたりして寢そべつゝゐた。

『なァ佛樣つてえ有難えもんだな』

一人が斯う云ひ出すと

『何云つてるんでえ』と直ぐ隣の男が混ぜつ返した。

『なぜかな』とその隣の男がその言葉を妙にホジリ出した。

『斯うして緣もゆかりもねえものにまで惠を分つて呉れるなんてなー』

『ハッハッハ。都合の好い事を吐かしてるね——だから、此處へ來ずにやゐられねえッてンだらう』

『ハハ……』

皆もドッと笑ひ出した。

このさわぎも知らぬげに賽錢箱の傍へ大跌座を掻いて外の方を見ながら座つてゐたのは年の頃五十に近いゴマ塩頭の男であつた。

腰にさげてゐた煙草入れとヒウチ石を取り出し、左手のヒウチ石に載つけたモグサを切りと親指で直しながら、右手の鋼鐵をカチン〳〵打突てゐる。

その度に線香花火のやうな火花がパッ〳〵と出て二三邊同じ事を繰返してゐる中にモグサに火が移つたらしく、プス〳〵と微かな煙が立つて、赤い火の玉が續いて見えて來た。

其男は急いでこれをくわえてゐた煙管に移してスパリ〳〵甘しさうに吹かしてゐた。

雁首の端から立ち昇る細い煙と口や鼻から吐き出す煙とは天井板の處で薄もやのやうにうづ卷いてゐた。

凝乎と座つたまゝ薄氣味の惡るい眼付をしてヂロリ〳〵外の方へ眼を配つてゐるらしい此男は漁師仲間では『發頭』と云ふ綽名で知られた男であつた。

阿布里の生れで、何處で賭博を開いても、手が這入れば何時も俺が『發頭人』だと言

つて出ると云ふのでこの名が出たと言ふのだ。漁師仲間で『發頭々々』と云つて一目置いてゐた裏面には發頭の俠氣を崇めるばかりでなく、此男がゐれば何處で盆を敷いても自分等は安全だと云ふずるい考へからであつた。

も一つの理由は、發頭が至つて酒癖が惡く、一通りでない狂暴性を持つてゐたからであつた。

その狂暴性と云ふのは白面の時は別人のやうだが、酒を呷つて蒼白い顏になつて目を据え出すと、浮つかり機嫌を損ねやうものなら、命は無いものと覺悟を極めなければならないと云ふんだ。其怖ろしい經驗を常になめさせられてゐる漁師仲間は、それの恐怖心と發頭の俠氣を利用しやうとする心とでコンガラがつて一種の尊敬と化つて行つたものであつた。

若い時分——やくざの仲間に紛れ込んで、ッキ合ひ飯も食つたことのある男だけにその膽力には凄い落付があつた。

其時分からでは募り募つた狂暴性は仲間の敬遠を食つてゐる程にも手の付けられないものであつた。

凝つと眼を据えて考へてゐるのは白面の時ならば酒と女と飯よりも好きな賭博の外には何にもなかつた。

その日も仲間を其堂へ引張て來たと云ふのには思ひ掛けない同心棒（漁師が船主の

眼をかすめて魚を胡魔化し、金に代へて仲間で分配すること）で這入つた金で仲間の懐が急に膨れたのを見て惡心を起し、相手に目配して俄賭博でもやつて根こそぎ奴等の懐をハタいて了はふと云ふ企みからであつた。

勿論その相手といふのはマンボーの吉五郎であつた。

この二人は負けず劣らずの好い敵手であつた。酒を呑んで發頭が暴れ出しても若盛りの吉五郎には押へ付けられて了ふといふので流石の發頭も吉には一歩譲つてゐた。二年程前の夏、上總から返つて來たての吉と發頭とが始めて渡り合つて死物狂の喧嘩をしたのもこの堂であつた。

二人ともドスを拔放つて立はだかつた時には漁師どもは皆慄え上つて誰も側へは寄りつけなかつた。常には偉さうな事を言つてゐる留や源七までがガク〳〵と慄え出し後をも見ずに逃げ出したといふのはその時であつた。二人はそのあとで長いことにらみ合つてゐたが吉は肩先に深手を負ひ發頭は右の二の腕に傷手を受けてゐたが、それでもくつせず鎬ぎを削つて戰つてゐる處へ通りかゝつたキッネ取りの與吉兄弟の仲裁で漸く二人ともドスを納に收め仲直りをした。

それ以來賭博の事では始終喧嘩もするが遂ぞその時のやうな喧嘩は仕たことはなかつた。

その傷あとは與吉から貰つた血止めの桐炭で二人とも同じ様に青く光つてゐる。吉の

肩には三寸程の長さに、發頭の二の腕には二寸許の大さに堅まつてゐた。

その傷あとの事などは二人とも全く忘れて了つてゐるやうにプスりとも言出さなかつた。たゞ仲間の話題の種として僅かに殘つてゐる位なものであつた。けれどもその喧嘩から漁師達は二人を何つち付かずに立てるやうになつて來た。

此マンボーの吉五郎は川名の生れで、生ひ拔きの漁師だが、男もよし、口前もよく漁師には珍らしい氣配だつたから、女にはチヤホヤされるといふのでつまり身は持てなかつた。親爺の殘した僅ばかりの金は手もなく使ひ果し、體一貫でやくざ仲間に入り込んでゐる内、不圖した事から同じ町の宗五郎の女房おふでと知り合になつた惡緣で親爺の眼をかすめて不義の戀に落ちて行つたが、何う血迷つたものか、おふでは永年連れ添つてゐた夫と愛しい三人の子供までも置き去りにして、吉五郎と二人で姿を消して了つた。

宗五郎は咽び泣いてゐる子供達の悲しみを見るにつけ、姦夫姦婦のやり口を面憎いと思はずにはゐられなかつたが自分の腹を痛めた子供や自分迄も捨てゝ行て終つた女房の腐つた心を考へると少しの未練もなくなつて終つた。

宗五郎のあつさりした男らしさには人々の同情が集つて來て、おとく、おいく、おかよの三人の女兒は、何うにかその同情の手で育てられて行つた。

吉五郎とおふでが落ちて行つた先は上總の二軒塚といふ所であつた。其處で早速や

くざの仲間へ紛れ込んで取敢へず生活の道を立てゝ行かうと努めたのであつた。

幸にも其處には飯野、青柳、富津一帶を獨り舞臺に大きな繩張りを持つてゐた二軒塚の忠兵衛と呼ぶ親分がゐたから、吉五郎は頼みを入れて其の身内となつた。

そのお蔭で古巣を離れた渡り鳥も漸々口を糊する稼ぎにありついた。

月日は流れて三年目の夏が來た頃にはおふでは、もう吉五郎の胤を宿して太鼓腹を抱いてゐた。

哀れな渡り鳥の心には故郷以外には懐かしいものはなかつた。産月が近くなるとおふでの憧れは彌々高まつて行つた。その切ない望みから吉五郎もとう〳〵再び元の古巣へ舞ひ戻つて來た。忘れられてゐた二人の噂はまた高くなつたが、その時は宗五郎も、もう何もかも諦めてゐた時だから間へ立つ男の思ひ通りに進んで、おふでを改めて吉五郎に讓らうといふ話がスラ〳〵と纏つて外面の繕ひだけは曲りなりにも付けて行つた。

それから二年の時日が夢のやうに過ぎておふでは二人目の稚兒を抱いてゐた。海鳴りの音が一しきり高くなつて來る後からは西風が颯と入れて來た。お堂の中には先刻のまゝ死んだやうに眠つてゐる仲間の前に相も變らず外を凝視めながら煙管をくわえた發頭の姿が賽錢箱の側に見られた。

仲間の狩り出しに途中から出掛けて行つた吉五郎はまだ歸らなかつた。

眉根ッ子をピク〳〵動かしながら、發頭が氣を揉んでゐる姿があり〳〵窺はれる。夕暮れの冷たさが四邊に迫る頃吉五郎は只一人でフラッと歸つて來た。

『何だ駄目なのか』

發頭はムッとした様な顔付で斯う言つたが、その言葉の裡には多分に劍が含まれてゐた。

『ム、駄目だ、奴等は今那古で飲んでゐアがるんだ』

『さうか』

と——發頭は一寸うなづいて見せただけで氣のない返事をした。

『仕方がねえさ、是だけでやらう』

『ム』

『では奴等を起さうかな』

吉五郎は途中で取つて來た一本の草の穂をグッスリ寢入つてゐる仲間の鼻の穴へ突込んで廻つた。

『クション』

と、くさめをする後から皆眼を醒して起き上つた。

『マンボー酷え事をしアがるな』

留は寢とぼけた眼をこすりながら斯うブツ〳〵言つた。

『さうだ鼻の穴を煙突と間違えられて堪まるもんか』

渡七もその後から斯ら言つた。

マンボーは唯笑つてゐて應へなかつたが、其處へドッカリ腰を下して

『ハッハッハ　手前達はまだすきだらけだぞ、其の態つたらありやしねえ。こんな事では何時何處で敵に狙はれるか判らねえが、こう云ふ時に犬死をしなくちやならねえ武士はつば音一つで目を醒ますと云ふぢやねえか、是からやくざの仲間へでも這入らうと云ふ者はもう少し修業をつまなくつちやならねえ、俺は今一寸試して見たばかりさハハ……』

『幾ら修業でも鼻の穴が痛くて堪らねえ』

と熊が言つたので皆はドッと笑ひ出した。

『體裁の好い事を言つて胡麻化さうたつて俺は承知しねえぞ』

と三五郎もむきになつたが、マンボーは唯笑つてゐて相手にしなかつた。

『マンボー、おい鼻の穴を煙管と間違えるといふ法があるか』

源七も食つて掛つたが發頭の咳拂ひ一つで治つて了つた。

皆揃つた所で發頭は

『何うだな皆是れを一コッパやつて見ねえか』

と——賭博をする手眞似をやつて見せた。

人々は苦虫をかみ潰した様な面付を凝つと見てゐたが

『ム、好いなア』

『——好いとも』

『——やらう』

と云ふ賛成の聲が突差に人々の口から流れ出て來た。

吉五郎の視線が發頭の視線と一致すると何方もニヤリと笑つた。

『では何時もの處へ出掛けるとしやう』

と氣の早い發頭は煙管を差に納めて勢よく立ち上つた。

『サア出掛けやう』

と人々も續いて立ち上つた。

夕日が相模の山の上へ傾いてゐるのを望み見ながら人々は街道を港の方へ歩いて行つた。

『ウヽヽ、寒いなア』

『また西風か』

斯んな事を云ひながら發頭が眞先に歩いて行くのを追つかけるやうに歩いた。

殿りは吉で、後の方から兩手を帶の間へ突込んで何か切りに考へながらノッリ〳〵歩いてゐた。

『吉、この草だらう。俺達の鼻へ突込んだのは——』

留は直ぐ後から歩いて來る吉を振り返つて斯う云つた。

『莫迦野郎、まだ彼んな事をいつてゐアがる』

吉は呆れたといふ顔付で怒鳴り返した。

人々が西の古船の前へ着いた頃は夕日は赤くたゞれて雲も空も山も血のやうな色に彩られてゐた。

怖しい岸をかむ浪の音だけが一際凄しかつた。

西が出たので濱邊には漁船が皆舳先を陸の方へ列べて引張り上げられてゐた。沖に見える平島には激浪が打突つて白い泡がうづを卷いてゐた。足元に碎ける浪のしぶきは風に交じつて冷やりと頰や襟元を打つた。岩磐の上に立つてゐる琴平神社の裏の方には篠藪に蔽はれたダエン形の鯨山が卵を倒したやうに立つてゐる。

陽が落ちると海も空も山も段々黃昏れて暗い夕もやに包まれて行つた。風が強くなつて砂礫がヒユウ〳〵と人々の頰を打つた。

古船の蔭に立つてゐた發頭はカンテラと食物の用意を留と源七に言ひ付けた。

二人の姿が砂を踏んでやみの中へ消えて行くのを見送つてから、何か思ひ付いたやうに二人を呼止めて怒鳴り出した。

『お——い』

『おー、何んだア——』

『留ーい、付け木を忘れるな——ア』

『ウ——何處にあるんだ——ア』

『船にあるだらう——オ』

『船にはないぞ——オ』

『なけりや、何處かで搔拂つて來ーい』

『付け木は何にするんだ——ア』

『何にしたつて好いから持つて來ーい』

『それだから聞いてるんだ——ア』

『莫迦野郎、ヒウチ石だけでカンテラへ燈火が付くか——い』

『さうか——ア、判つた。無けりや何うするだあ——ッ』

『間抜奴、無けりや硫黃片でも好いや、硫黃なら俺の釣箱を開けて見ろ——オ澤山這入つてら——ア』

『お——』

其の返事を聞いて發頭はまた船の蔭へ歸りかけたが、顏には忌々しさうな形相が表はれてゐた。發頭はそれから船をよぢ登つて甲板へ立つた。人々も後から甲板へ這ひ上つて行つたが、風が強いので三五郎は途中から吹き飛ばされてドサリと砂の上へ仰

向けに落ちた。

『畜生！』

と云ひながら口の中に這入つた砂をプウ〳〵吹きながら又這ひ上つて來た。

人々は甲板が風當りが強いので梯子を下りて發頭と吉を眞先に手探りで船室へ下りて行つた。

船の中は洞穴のやうで、うつかり鼻をつまゝれても判らない位眞暗だ。發頭と吉とが先に立つて案内知つた梯子を下りて船室に足をかけやうとした。

突然、やみの中でバタ〳〵〳〵と云ふ不思議な物音——一同ギョッとして、突立つたまゝシーンと沈まつて了つた。

沈默は暫時續いたが、それが何だか見極めがつかない中はうつかり口を開くものがない。暫くすると吉は發頭の耳の端へ口を持つて行つて

『今のは何かな』

『ム、俺にも判らないが狐やタヌキにしては足音が大きかつたな』

二人のさゝやきはこれで終つてしまつた。

八人は進むも退くも出來なくなつて一塊になつて無氣味な氣持で突立つてゐる。それは果して何だらうか、獸か人か、獸ならば咬みついて來るだらう。盗人なら白刃を持つて迫つて來るだらう。それが暗やみの中で身には寸鐵も帶びてゐない人々だ。目

の前に危險はブラ下つてゐるのだが、それが直ぐ迫つて來るものか來ないものか暗やみのことだから全く判らない。何つちにしても人々は壓迫されるやうな恐怖に押へ付けられて進むことも退くことも出來ない狀態に置かれてゐる。

ハラ〳〵してゐる丈けで何處から迫つて來るのかも判らない暗の中の敵に運命を任せて身構へてゐるだけである。何うしたら好びのかも判らない。迫つて來たならばその物音を聞いて無手でも戰はなければならないと覺悟を決めて凝つと樣子を窺つてゐるが、その後はコトリといふ物音一つしない。外は猛り狂ふ波の音と風の音が烈しく聞えるだけであるが、中では人々が命を的にやみと睨めつくらだ。

先頭に立つてゐる吉と發頭とは危險に身を晒してゐるだけ一言も喋べらずに樣子を窺つてゐるらしいがその後の方にゐるものは危險が少いだけに强みがある。

この時後の方から、この沈默を破つて怒鳴り出したものがある。

『誰だッ、俺達の船にゐアがつたなア』

その聲は熊であつた。

『人間なら返事をしろッ』

それは三五郎の聲であつた。

やみの中は森と靜まり返つたのみで期待した應へはなかつた。

『返事が無けりや愈々狐かタヌキだ。何もビク〳〵する事アねえ。やみの中から白刃

でも飛び出して來やがるかと思つて用心してゐたんだ。さうと判りや怖いことも何もねえ、サア皆船板と横で畜生を生捕らう』

といふ熊の聲で人々は活氣付いた。

熊の聲が止むか止まないに船室の隅ッ子の方から震えるやうな聲が起つて來た。

『旦那様、御勘辨なすつて下せい』

其の聲が一同の胸にドキンと響いた。

『畜生！、手前は乞食だな、今まで人に手間暇をかけさせアがつて、何だつて默つて居アがつたんだ。サア其の譯を言へよ、其の譯を——』

發頭の聲は鋭かつた。

『ハイ何だか怖ろしくて默つて居りましたんで御座んす。どうぞ御勘辨を——』

『今日は縁起糞が惡いから此奴を血祭りにしやう』

吉も今までの事が癪に障つたやうに斯う言ひ出した。

『アヽどうぞ御勘辨なすつて下さい。哀れな乞食で御座んす』

船底に頭を擦り付けてブル〳〵震へながら頼み込んでゐる姿が、やみの中にも窺はれる。

『哀れも糞もあるもんか、俺達のじやまをしときアがつてな、幾ら謝つたつて許せるもんか』

『アヽお情けで御座んす。どうぞ勘辨なすつて下さい』

乞食はしきりに泣聲になつて頼んでゐる。

『駄目だ。何と云つたつて駄目だ。許せつたつて此方の腹の虫が治まらねえや』

そのさわぎの眞最中外で誰か古船をドン〳〵叩いてゐる。

『おゝ』

と怒鳴つた聲で、留と源七とが歸つて來たのだと云ふことが判つた。その聲を聞きつけた發頭は

『熊、三五郎と行つて食ひ物を此處へ運んで呉れ』

『よし來た』

と二人は梯子を上つて甲板へ出て行つた。

食物が來たと云ふ聲で乞食の方は放つたらかしになつた。

『おゝ熊か、何か網を下げてくれ』

『つなんかあるもんか』

『無けりや二人の帶でも好いや下げて呉れ』

『おゝ合點だ』

と二人は帶を外して眞中を繋ぎ合して投げてよこした。

『重てえぞ兵糧だから大事に引揚げろ——このお鉢を落つことしたら飯は抜きにする

だけだ』
『おつと是だけか』
『まだあるぞ——それ一ッコ結びだから用心しろ』
『これでいゝのか』
『まだゞよ』
『莫迦に集めて來やがつたな——それ』
『こりや何だ、莫迦に輕いな』
『これか、カンテラだ。引つくり返せば燈火はないと思へよ』
『難かしいんだな、おつとゝさあ上つて來い』
『おゝ良いか』
と云つて留と源七とが續いて甲板へ上つて來る。梯子を下りて船室へ行つて見ると入口の所で皆集つてゐる中で發頭がカチン〳〵ヒウチ石を打つてゐる。艾へ火が移ると
『おい留、付け木は何處だ』
『付け木はねえから硫黄片を持つて來た』
『さうかそれを此處へよこせ』
『ホーッ』

『よし〳〵』
と云つてその硫黄片を火の玉の上へかざすと、息塞るやうな香がして青い火がメラ〳〵と燃え上つて來た。發頭がその火をカンテラに移すと、四邊はパッと明るくなつて來る。發頭はそれを下げると、唐突に船室の中へはいつて行つた。人々もその後へ續いたが、留と源七とは室の隅つ子にゐる男の姿に不審の目をむき出して
『彼れは一体何んだ』と叫んだ
『此畜生が居たお蔭ですつかり嚇かされつちまつたんだ』
『何だ乞食ちやねえか』
ザン切り頭を板の上へすり付けて兩手を合はせて拜んでゐる。ボロ〳〵の着衣の間からは膝や胴の半分がハミ出してゐる。
『ヤイ手前は旅の乞食か、地の乞食か』
と留がキメ付ける。
『ハイ旅の乞食で御座んす——どうぞお許しを』
すると今度は源七が何を思つたか
『手前えは一体野郎か、阿魔か』
と言ひ出したので皆どつと笑ひ出した。
『おい、三五郎外へ引擦り出して疊んぢまへ』

發頭は斯う怒鳴つた。

『おゝ』

と其聲に應じて三五郎はズカ〳〵乞食の側へ進んで行つた。唐突襟髪を引つかんで引立て梯子の方へ引ずつて行つた。

其時乞食の顏がよく見えて來た。毛ムクじやらな四十男であつた。人々は手を叩いて

『やつた〳〵』とはやし立てる。

『カンテラを見せて呉れ』

と云ふ聲で熊は後から梯子の下までカンテラを差上げてゐる。三五郎はやつとの事で甲板まで引上げたが、それから乞食が逃げやうとするのを押へ付け

『それ畜生』

と云ふ掛聲でグンと突飛ばしたので六尺ばかりの甲板からトンボ返しにどしんと砂の上へ落ちて行つた。

砂の上の黑い影は落ちたなり身動きもしなかつたのを見て三五郎は急いで船室の方へ降りて行つた。

船室では吉が先に立つて酒の口を開けさせてたつた二つ切りしかない賽振りの茶碗で發頭と二人で飲み始じめた所だつた。

『三五郎俺の傍へ來いよ、お前の手柄で彼ん畜生を追拂つたんだから今俺が茶椀を直

ぐ渡すから待つてゐろ』

『ウム、さうか』

と三五郎は發頭の傍へ腰を下す。

『彼奴はどうしたな』

『上から突き落すとグッタリして動かねえから無論氣絶したらしいな』

『あんな奴はまた直ぐ生き返るよ』

『歸る時まで寢てゐたら海ん中へでも叩つ込んでやらう』

『それは面白いな』

『そら茶椀だ』

『おい來た』

と三五郎は茶わんを受取つて滿々と酒を茶わんへ注いで貰つた。順々に茶わんが廻つて了つた時分には樽は空になつてゐた。

『何だ一杯こつきりか、佛樣みたいだな』

と發頭はさも欲しさうな樣子をして言つた。

酒が濟んでお鉢のふたを開けると中には握り飯が一杯詰つてゐた。それを好きなだけ各々掌の上へ載つけて食べ始める。

『お菜はないのか』

『下の方へ入れて置くつて言つてたぜ』

と留が口を挿んだ。

下からは鰹の煮付と澤庵とがどつさり出て來る。それを寄つてたかつて貪り喰くしてから一寸息を入れて勝負に取り掛つた。

勝負が始ると吉は四邊に目を配るやうな樣子をして賽を振つてゐるが吉の振るものは百發百中で外れると云ふ事はなかつた。

發頭は二回までも吉の勝となつて了つたので、少し自暴氣味になつて來た。

例の通り腰から煙草入れを取り出し凝つと考へ込みながらカンテラの火で煙草を吹かし始めたが、其處で發頭の頭の中を往來したものは、どうして勝たうかと云ふ考へだけであつた。

勿論エカサマをやれば勝てるとは譯り切つた事だが發頭の俠氣とそんなやましい考へが容れられる譯はなかつた。其の時不圖發頭の中に閃いたのは吉の賽の振り方であつた。

『怪しい』

と思ふ一念は發頭の或る考へに大きな渦を卷いてこんがらがつた。頭の中はその目的に向つて驀つしぐらに走り出した。

『さうだ、確かに怪しい。吉は旅で腕を磨いたと云ふが二年此の方吉の負けたと云ふ

ことを聞かない。人間に變りはない筈だ。二年や三年の修業であんな鮮かな賽が振れるならば俺達にも出來なければならない』

と云ふ疑念が頭の中に一杯になつて來た。さうして彼の眼は私かに吉の膝の上へ注がれたのであつた。

それと反對に勝ち誇つた吉の腕は益々鮮かなさえを見せて行つた。

發頭の眼は吉の異常に膨れてゐる指の股に注れた時發頭の頰邊にはあるかなきかの微笑がほんのり浮んで來た。

吉はそれとは知らず

『ホラどうだ、俺の勝ちだらう』

『チエ！』奴等は頭を掻いた。

吉が賽を片付けやうとしてゐる突端横合から急に飛込んで行つたのは發頭であつた。

『ヤイ吉一寸待つた』

と云ふが早いか吉の利腕をムツと押さへてその賽を引つたくつて了つた。

『何しアがるんでえ畜生！』

と吉は發頭に向つて行つた。發頭はクルッと後を向いて打突つて來る吉の手を外して吉の頭の上へポカリと一擊を加へた。吉も發頭の横面にガンと云ふ一擊。次いで掴み合となつた。

『人の物を無体に引つたくりアがつたな、サア返せ』
『返すもんか、馬鹿野郎』
『何ッ！』
と吉はカッとなつて再び發頭に向つて行つた。
其の只ならぬ權幕に呆氣に取られてゐた人々は只茫然と突立つてゐたが、熊がその間へ割つて入つた。
『吉まあ待ちねえ』
『じやまするな——』と突然熊を突退ける奴を熊は構はず組み付いて行つた。
發頭は其のすきに賽を取上げて見た。果してそれは天地四方とも同じ印の僞せ賽であつた。それを見ると發頭の顏はカッと怒りに燃えて來た。
『ヤイ吉、此の賽は何だ、手前は今迄俺達をよくも胡麻化して來やがつたな、皆これを見ろ、可怪しい可怪しいと思つてゐたが俺達の金を皆是れで捲上げてゐアがつたんだ。そのエカサマが此處でバレたからいゝが判らなけりや尙此先も知らぬ顏でエカサマをやつて行つたに違ひあるめえ、太えエカサマ野郎だ、サア俺達を胡麻化して取つた金を直ぐ此處へ並べればよし、並べられなきや氣の毒だが命はもらつたぞ』
吉は發頭の顏を穴のあく程睨み付け今にも飛付きさうな顏になつてゐたが、次の瞬間良心の苛責から如何にも其場に居堪まらないと云つた樣子に變つて行つたけれども

その次には吉性來の毒食ひは血までと云ふ捨鉢な氣持が湧いて來たのか
『判つたら仕方がねえや莫迦にした方が利口か莫迦にされた方がばかか判り切つた話ぢやねえか、サア煮るとも食ふとも勝手にして見ろ』
と言つた儘、タンカを切り出した。
『何だと俺達を胡麻化してゐアがつて、濟まなかつたと一言吐かせねえ野郎だとは隨分見上げた奴だ。サア皆バラシちめえ』
と云ふ發頭の一聲で熊も留も源七も、六七人はその周圍から突掛つて物凄い格闘が始まつたが、三五郎の匿し持つた槓の一擊は吉の惱天を强かに打のめし
『ウン！』
と云ふ一聲で其の場に打倒れ、齒を喰ひしばつたまゝ息絶えて了つた。
『態ア見アがれ！』
『口程にもねえ野郎だな』
と口々に惡口を浴びせてゐた。
發頭は倒れてゐる死骸の懷中から引張り出した胴卷を皆の前へ放り出した。
『これを見ねえ、吉の野郎はこの通り持つてゐアがるんだ、これは皆俺達を胡麻化した金なんだ、構ふ事はねえからこれを勘定して頭割にしちめえ』
『よし來た——仲々重いぞ』

と留と音は金をブチ撒けて勘定を始め、次いで板の上へ九つの山を造り上げた。今までの喧嘩三味でシャチコ張つてゐた俺等の顔も金の顔を見て急に微笑に代つて來た。

『イヤ——今日は喧嘩のお蔭で偉え身入りだぞ』

と一人〳〵自分の胴卷へ移し込んで

『さあそれが濟んだら是奴を片附けるんだ——引ずつて行つてあの井戸の中へ叩つ込んぢめえ』

と發頭が言ひ出したが、又急に考へ出した樣に、

『よく言つて置くがこれを喋べつたやつはこの通りだからな』

『判つてゐるよ發頭、誰もそんなやつは一人だつてゐやしねえ、命は欲いからな』

『さうかそれなら好い——物事は念には念を入れろと言ふ事があるからな——熊一寸手を貸して呉れ、さ此奴を甲板へ轉がして來やう』

發頭と熊は吉の死骸を甲板へ出して置いて再び船の中へ戻つて行つた。

『留と源七はお鉢や何かを元の所へ放り込んで呉れ、後片付けは二人で澤山だ。三五郎と熊は先に出掛けて行つて井戸の廻りで張番だ。俺は皆とあいつを引張つて行くからな、手順は此の通りだぞ、好いかなサア始めろ——』

と發頭は一人で差圖に夢中であつた。

其の一部始終を古船に身を持たせて立聞いてゐた一つの黑い影があつた。それは云ふ迄もなく最前の乞食であつた。

人々の動遙めくのを見て再び元の物影へ身を潜めたらしかつたが、中では誰も知つてゐるものはなかつた。ところが間もなく船の上へニウと表れた二つの黑い影はお鉢や食器を抱へた留と源七であつた。船から飛び下りたかと思ふと姿はもうやみに消えて了つた。もう二つの影が次いで甲板の上へ現らはれたが、それも何時かやみに吸はれる樣に消え失せる。

その次に出て來たのは三つの影だが、その中の一つは聲を落して差圖してゐるらしいが、それは紛れもない發頭であつた。

『構ふ事はねえ突落せー』

聲に應じてドシンと云ふ響き、續いて其の人々の飛下りる足音、二つの黑い影が砂の上を黑い物を引摺り出したのを制する聲がする。

『それでは跡がついていかねえ抱いて行け』

『嫌な役目だな』

『マア我慢しねえ』

と云ふのは發頭の聲だ。

井戸の端まで來ると其處には二つの黑い影があつた——熊と三五郎である。

『近所は大丈夫かな』
『ム、大丈夫だ』
『よし、サア叩ッ込め』
其の聲に次いで怖しい響がドシンと鳴り渡つた。
『さあ是でよし』
と五つの影は一塊りになつて港の方へ消えて行つた。
その後で船の中から出て來た二人の男の一人は手にカンテラを下げてゐた。その光りが鯨山の蔭に消えて了つた頃モク〳〵と黑いかげが古船に近附いて來た。それは先刻の乞食であつた。間もなくその黑影は船の甲板から船の中へ消えて了つた。

×　×　×

其の翌々日吉五郎の死骸は古井戸の中から引揚げられ、濱では女達の濱念佛が肅々に營まれて、亡骸は千日堂の墓地に葬られた。死骸の發見されたのは乞食が敎へたものだと云ふ噂が酷く發頭一味の神經を刺戟した事は言ふ迄もなかつた。
その翌日から乞食の姿が古船から消え失せたと云ふことに就いては發頭一味の手にかゝつたものか一味の追跡の爲めに姿を匿したものか全く判らない。
間もなく、警察の活動から吉五郎の墓が開かれ解剖に附されたが。死體の胃の中から出て來たのは五つの僞せ賽であつた。

吉五郎は巧みに六つの中五つを呑込んでしまつたが——殘る一つが吉五郎を斯うした運命に導びいたものであつた。

（完）

（作者言）
吉五郎とおふでとの間に生れた子は鍋吉と音吉と云ふ二人の男の子があつたか今は何れも死亡してゐる。
宗五郎とおふでとの間に生れたおとく、おいく、おかよの中の一人は今在生中らしいから何れも假名にした。

×　×　×

エカサマ師が賽を匿したのは指の又で小指と藥指、藥指と中指、中指と人差指の間で左手に三個、右手に三個、都合六個であつた。無理に指の間へ物を蓄へるのだから其の爲めにタコが出來たり、アカギレが出來たりし、困つたものださうだが痛さを堪らへて其處へ油をぬり込んだりヒビ藥を詰めたりしても力めて賽を入れる餘裕の出來るやうにしてゐたのでエカサマ師の指は一種獨特なバン廣なものであつたと云ふ話です。

傳說

坂田の長エム

苟しくも劍法を語るものは此房州に坂田の長エムがある事を忘れてはならない。長エムは西岬村伊藤に生れ、江戸では一刀流の指南所を開いてゐたが明治維新と共に幕臣等と上野の彰義隊に加り薩長二藩の砲撃を浴びせられ一堪りもなく崩れ落ちて房州へ落ちて來たものであつた。それ以來明治の中葉までは實兄の仕事を助けながら坂田で餘生を送つてゐた。

その頃忘れかけてゐた劍道熱がまた不思議に勃興して來て實兄と二人で押送船の船夫となつて働らいてゐた。長エムは移り行く世の姿を靜かに眺めながら楫を捨てゝまた好きな竹刀を取るやうになつた。

『桃李物言はず下自ら徑をなす』

と云ふ譬の通りむつつりやの長エムは奥義に達した劍道を別に語ろうともしなかつたが、何時かしら人々の認むる所となつて行つた。

實際彼の稽古を受けて其非凡な太刀筋を見たものは、我も我もと押掛けて行つて近郷近在からやつて來る弟子達だけでも素晴らしい數に上つてゐた。

長エムはその頃は可成り高齢に達してゐたが、彼の太刀筋は反對に不思議なさえを

見せて行つた。また長エムは口癖のやうに

『年を老つて息が切れるから組打だけは御免を被る』

と云つて巧みに力業の組打だけは避けてゐたらしかつたが、仕度をして道場に立てば壯者でも遠く及はないりんとした威風があつたと云ふことだ。

稽古をつけてゐる時でも彼れの太刀先の動きは凄じいもので、氣持のよいお胴を入れるポーンと云ふ音が、傍觀者にも快い響を傳へて舌を捲かせたと云ふ事だ。流石は達人だけに虛實の駈引も眞に徹して一度太刀を取つて敵と相對して凝乎と身構える時は、一擧一動は呂律に叶つてゐるばかりでなく、彼の體は何時か一節の太刀に匿れて不思議にも段々小さくなつて行つた。

これは彼の敵手になつて稽古を受けたもので太刀筋の判るやうになつたものが同じやうに語つた所であつた。

それは言ふ迄もなく彼が太刀に身を蔭して虛の狀態に入つたものである。

けれども次の瞬間攻勢に轉じ、大喝一聲打込んで行く時には今迄の虛の狀態はガラッと變つて體は何時の間にか怖しい大きな形になつて來る。これは虛を脫して實に入るの狀態であつた。

長エムは敵に對すると何時も後楯をキョロ〳〵探し求めてから初めて安心したやうに試合を始めるのが常であつた——流石は達人だ。その間の呼吸には一分のすきを見

せない姿勢である。

然し一點のすきを見せないと云ふのはもう一寸した瞬間で次の瞬間には態とすきを見せて置いて敵手を誘ふ虛の姿體に移つて來るが、うつかり其の誘ひの手に乘つて打込んで行くと長エムはヒラリと身を交す、突端間髪をいれず『えゝ』と云ふ氣合の聲に打込んで來る太刀風は電光のやうで容易に遁げることが出來ないと云ふ早業である。お胴は何時も左膝を一寸突いて打込むので見事な胴を切つたさうだが、時とするとお面を入れて置いて直ぐ後からお胴に轉じて行く手際に至つては將さに入神の技と云ふべきであつた。而かも胴を打つてから直ぐ敵をやり過して前へ進んで行く呼吸は實戰に當つたものでなければ味はうことの出來ない境地であつた。

これ程の達人である長エムが村人の間には押送船い長エムとして知られてゐるだけで苗字帶刀を許された何といふ武士で何處の指南所で劍道を敎へてゐたかと云ふ事さへも知つてゐるものがないと云ふのは寔に遺憾とする處である。

沈默寡言の長エムは寧ろ本懷であつたかも知れぬが、これだけの達人を後世に傳へやうともせず、ムザ〳〵葬り去つて省みないと云ふのは寔に傷ましい限りである。

處が人々の頭の中に殘つてゐる長エムは武道の達人と云つたよりも寧ろ滑稽味のある親しみ易い長エムで、如何にも漁師村らしい周圍の有樣が窺はれる。

『長エムどん一つ賴みます』

と云つて禮儀作法も知らない大きな圖體の漁師どもに取卷かれながら小柄で痩せぎすな老人が意のまゝに竹刀をポン〳〵打込んで代る〳〵稽古を付けてゐる有樣が想ひ起されるが、その吹けば飛ぶやうな老人が時たま屈强な若者を相手に面白い慰みをやつて漁師どもと腹を抱へて笑ひ興じたと云ふのだから仲々面白い。

或日のこと稽古が一應濟んでから長エムは莚の上に仰臥して手足を四人の若者に押さへさせ、その上へ疊を載せて、その上へまた四人の若者を載せて置いて、充分警戒を與へてから

『宜しいか』

『ム、宜しい』

『では起きるぞ、しつかり押へとれ』

と云つて

『えゝ』

と云ふ氣合をかけたかと思ふと、何時が長エムの體はその疊の下から拔け出してゐた。

船夫等は長エムがカイの上へ乘つてゐるのを見付け次第海の中へ放り込んでやらうとしきりに其のすきを窺つてゐたが、注意周到な彼には仲々その機會がなかつた。

或日長エムが沖を凝視めながらカイの上へ乘つてゐるので、好機御座ンなれとそつ

と後からカイの上へ乘つて長エムの體が浮き上つてきた所を後のカイを放さうとする刹那、長エムの方でサッと筵の上へ乘り移つたので其の男はアベコベに海の中へ叩き落されて了つた。

棒の稽古に夢中になつてゐた若者達が長エムの姿が其の場へ表はれたのを見て唐突四方から長エムの頭上目懸けて打下してきた。長エムはその棒の下に無論打据えられたものと思つてゐると、何時の間にかその重圍を脱して後の方でセヽラ笑つてゐた。

或日長エムは五人の弟子達に小石を拾はせ或る間隔を置いて一時に體を目懸けて投げさせたが、長エムは持つてゐた竹刀でカチン〳〵と皆受止めて一つとして體へは當らなかつた。弟子どもは皆其の早業に感嘆して言ふ所を知らなかつたとの事である。

また一見痩せ衰へてゐる長エムの怪力を語る傳說が殘つてゐるが、それは船の上の出來事であつたらしい。船夫等は長エムの油斷もすきもないのに呆れて多少自暴氣味になつてきてゐたので船底の生スから鰯を取つてくれと云つて長エムがしきりと中腰になつて生スの中を覗き込んで魚を追ひ廻してゐる所を見すまし、後から足を長エムの背中へかけて生スの中へ放り込まうとすると長エムは身を交はして、その足首を魚を持つたまゝ二本指で押さへたが、其の男は動くも引くも出來なかつた。到々痛さに堪へ切れなくて眞靑になつて謝つて許を乞ふた。その男は後で仲間に向つて

『彼れが長エムか、えゝ、長エムなら何故さうだと一言言つてくれなかつたか』

と恨みの言葉を述べたと言ふ話だ。

長エムの怪力はまた有名で十六貫の米俵を竹刀の上、載せてそれを庇の上へそつと載せて置いて、それからまた竹刀にうけてそつと下へ下したと云ふ話がある。

も一つは、一寸魔術師でもあるかのやうに思はれる話だが、仰向けに寝て居ながら竹刀で梁を打つたと云ふが、斯うした早業は達人でもなければできない手練であらう伊藤や、坂田には彼の流れを汲んだ弟子どもが澤山あるが、その中でも小太刀の宗五郎は彼の甥で門弟中では隨一と云はれた男であつた。

（了）

神隠しの童

安西團次

昔は今と違つて人の住家が少くて、彼方に三軒、此方に二軒と云ふやうに大自然の擴がりの方が遙かに大きかつたので、其の偉力の前には人々は可成りの脅威や恐怖を覺えたものでした。深山の奥には神宿ると考へたのも無理からぬ事でした。

開びやく以來オノを入れたことのない山、大木が枝を交へて晝でさへ薄暗いやみをつくつてゐたのでした。斯うした山の魅力から來る不思議な力は何時かしら子供達の心を一種の恐怖に導かずに置かなかつたのでした。

別けても夜になつて、四邊が暗くなつて來ると、森閑と靜まり返つた森や林が一層恐ろしい神秘のやみに包まれて無限の展がりを見せ刻々に擴大して行つたからであります。そのやみの中には考へてもぞつとする狐や、タヌキや、狼や、猪などの怖しい動物がノソ〳〵歩き廻つて獲物を探してゐると云ふことが想像されるからでした。

加之に老人などから寝物語りに聞かされる話は皆タヌキや、狐の化ける話とか天狗の空木返しだとか云ふ不思議な話ばかりなので何時とはなしに物に怖ぢ恐るゝ心で一杯になつて子供の胸の底には何時も離るゝことのない暗い陰影がコビリ付いてゐたのでした。

眞夜中などに目をさました時などはその恐ろしさの爲めに寢つかれないことも珍らしくなかつたのでした。寢室の周圍までもひし〳〵と迫つて來てゐるやみは森に續いてゐると思へば夜になるのが恐しくてならなかつたのでした。

それとなく耳をそばたてるとやみの中から微かに響いて來るのはシヤキ〳〵〳〵——と云ふ氣味の惡い響でした。それからまたガラ〳〵〳〵ドシン——と云ふ木を伐り倒す音響が次々とはつきり聞えて來るのでした。——身の毛もよだつやうな怖しさに襲はれて布團の中に潜り込んで夜の明けるのを待つこともあつたのでした。

こんな恐しい經驗は山に住む少年でなくては判らないことゝ思はれるのです。

安西團次は斯うして房州は山岳地帶の平群村で人となつた。明治十二三年頃十六歳の時、八束村大神のさる農家に雇はれ一百姓奉公に出掛けて行つたのでした。農家の事で朝は暗い中から起き出して馬の糧を作つてから、夏、朝露を踏んで草刈を濟ませそれから野良仕事に出掛けて行くのでした。忙しい秋の秋獲が濟むと間もなく木こりやまき取りが始まつて冷たい木枯が吹く、冬の夜は臺所の隅で遲くまで夜なべの藁仕事に取りかゝるのでした。

その日も黃昏るゝ頃團次は藁打ちが濟んで糧桶に切藁と米糠を雜ぜた馬の糧を熱湯でかきませながら、馬屋の入口へ持つて行かうとするところでした。外の方で

『團次々々』

と呼ぶ聲がするので外へ出て行つて見ると、闇の中に立つてゐたのは生家の幼な馴染の新太でした。

『ア、新太か、遲いぢやないか、マア這入つて寬りして行くが好い』

『イヤさうしちや居られねえ、今日は兎狩りに來たンだが餘り取れたので持ち切れないから途中へ置いて來た。一寸手を貸して呉れ』

と云ふのでした。

團次は別に疑ふ餘地もなかつたので

『さうか』

と言つたまゝ新太の後に隨いて行つた。

それなり團次は歸らなかつた。

夜になつても翌朝になつても歸らなかつた。

人々の驚きは言葉にも盡せない程でした。

『狐やたぬきの仕業ぢやあるまいか』

と樣々に頭を惱ました末、生家へ使を出して安否を尋ねたのでした。生家では餘りの事に唯吃驚するばかりでしたが、加之に山狩りなどには出た事もない新太は爐の邊で鞋を作つてゐたと云ふのでした。

愈よ怪しいと判つてその日から團次の兩親を加へた捜索隊が繰り出されました。

鉦と太鼓と法ら貝を吹き鳴らして山と云ふ山、谷と云ふ谷を隈なく探し廻つたが團次の姿は見つからなかつたのでした。

『團次出ろやい』

と斯う大聲で呼び續けながら三日の間探したのでしたが應ふるのは山彦位のものでした。

そこでもう歸らないものと諦めて泣く〳〵兩親も引返して歸きました。

すると丁度五日目の夜、家ではまだ目をさましてゐた時でした。外の方でドシ——ンと云ふ恐ろしい音響がしました。

『ハッ』と思つて主人が起き出して見ると、霜柱の立つた庭の中に團次が倒れてゐたのでした。主人はびつくりして

『おい皆起きろ、團次が倒れてゐる』

と人々を呼び起しました。

そこで、主人夫婦は團次の體をそつと兩方から支へて床の中へ連れ込んで寢かしたのでした。

それから色々訊いて見たが團次は一語も口を開かなかつた。氣の拔けた無遊病者のやうにプス〳〵眠つてゐるだけでしたが三日目の晝頃になると昏すい狀態からさめて急にパッチリ目を開いて四邊をキョロ〳〵見廻したのでした。

周圍に集つてゐた人々は始めて愁眉を開いて顏には微笑さへ浮べて喜んだのでした。わけても母親は二つの眼に涙を浮かべながら斯う訊いたのでした。

『團次氣が付いたか』

『ウム』

主も側から口を添へました。

『團次、お前が居なくなつたのでエライさわぎをやつたぞ。村の人に出てもらつて三日ばかり山の中を探したが判らなかつた。一體何處へいつてたんだ』

團次は蒼白い顏を心持ちけいれんするやうにふるはせながら

『俺も恐つかねえ目に逢つてきた』

『どんな所に行つたのか』

母親は同情に滿ちた顏になつて、その答を待ち設けてゐるのでした。

團次は一寸躊躇してゐる樣子でしたが、思ひ切つたやうに語り出しました。

新太と二人で兎の置いてある所を探しに出かけたが何處までいつても新太は此處だと云ふことを言はないし、日が暮れるから急がうと言ふだけで、やみの中を飛ぶやうに走つて行くのでした。くらい山道を走つてゐる新太の足の早いのには吃驚するばかりでした。今まで新太には駈足でも負けたことがないのに不思議だなと思つてゐると新太は斯う申しました。

——俺は近頃金比羅様に願をかけて力持ちになるやうに頼んだところ、お前は大邊な力持ちにはなれねえから、その代りに早足にしてやると言つて呉れた。それからは少しも力が出ないが、足の方が急に達者になつて了つた。ウソと思ふなら俺の肩につかまつて見ろ——

と云ふので、新太の肩につかまつて見ると新太は急に勢よく走り出したのでした。

——あんまり駈けると危いぞ——と注意しても聞きませんでした。

——いや、馴れてゐるんだ大丈夫だから手を放すな——と云つたと思ふと、もう足は地面の上を放れてゐたのです。ヒユウ〳〵と風を切つて飛んで行くので、恐しくなつて目をつぶつてしつかり摑まつてゐました——新太飛んでるんぢやねえか危ねえから下ろして呉れ——と云つても——イヤ大丈夫だ。俺も早足のお蔭で少しは飛べるやうになつて來たので面白くて仕方がねえ。今では家にゐても詰らねえから毎日神様のお使ひをするやうになつたのだ——

と申しますから色々訊いて見ました。

——さうか、何をしてゐるのだ。

——お使役だ。

——幾らもらふのか。

——神様には金なんちうものは要らねえのだ。

——そんぢや何うして食つてゐるんだ。

——神様は何んにも食べも飲みもしないんだが、俺にだけは食物の在所を敎へてくれるんだ。

——何んなものを食つてゐるんだ。

——木の實や草の根だ。

——何んなものだ。

——柿だの栗だの。甘い松脂だのアケビだの

——それから

——無花果だの、ブドウや甘枇杷、蓮の實、グミ。

——まだあるのか

——松の實。

——そんなもので足りるのか

——足りるさ、餘んまり食べてはいけないんだ。

——食べ物が無くなつたら何うするんだ。

——一年中無くなることは無いよ。

——溫かい國へ行けば年中あるからな。

——遠くへ行くのは大變だらう。

——何に譯ないさ。

斯う答へるのでした。

新太は偉くなつたと思つてゐると俺達はもうスウ〳〵と黑いやみに包まれてゐる森の上を飛んでゐるのでした。

——ソラ那古座の頂上だ。

と云つて新太は俺を下しました。一休みすると新太はまた

——掴まれ。

と申したから、俺はまた掴まると、森の上を低く飛んで都古座の向ふ山の方へ飛んでいきました。

今度は少し勢が早くなつて下瀧山と八東の境界にある雷松の枝の頂上へ下りました。

新太は生家の方を指して

——あれがお前の家だ。

と申しましたから

——どれだ。

と言ふと

——あの燈がさうだ。

と言ひました。やみの中に燈が見えて、おぼろげな家の形でさうだと判りました。

それからまた飛び出して八東の方へ飛んで行きました。

——此處はお前の居る家の隣のクヌギの木の頂上だ。

と云つたので下を見下すと家はやみの中に微かに見えるが二軒とも燈も見えませんでした。

すると後の方から聲が掛つて姿は何處にもないが、その聲と新太は言ひ爭つてゐるのでした。爭は可成り烈しくなつて、それが何を言つてゐるのかさつぱり判りませんでした。まるで形のないものに向つて爭つてゐるやうなものでした。そのすきにオレは木の枝につかまつて降りやうとすると

——危いからオレの肩に掴まれ。と云つて新太は聞きませんでした。

仕方なくてまた肩に捉まりました。そこでまた二三間飛び出したと思ふ時、後の方から大きな聲がして新太はまた言ひ爭を始ました。俺は後を振返づて何處かにその聲の主がありはしないかと四方をキョロ〳〵探さうとする途端、肩から手が外れたのでした。ハッと思つたがもう間に合ひません。その後の事は全く判らなかつた。

と團次は斯う語つたのでした。

けれどもその話と云ふのは、人間には及びもつかない雲を掴かむやうな事で、猿飛佐助の忍術の話よりも不思議なものでした。聽いてゐた人々はただ怪げんな眉をひそめるだけでした。そんな事が有り得可き事か、有り得可からざる事かさへ判別する力はな

かつた。唯だ〳〵人間以上の力を持つた神様以外には出來ないことだと云ふ事だけはやつと呑み込めたらしかつた。

『人間業ではないな』

『さうだ。團次は神隱しに會つたのだ』

と——その噂が立つたのは明治十二、三年頃のことであつた。

× ×

平群村の生家へ歸つてから團次の心境は全く別人のやうに變つてゐた。そればかりか團次の外貌の上にも特に著しい變化があつた。その最も著しいものは彼の兩眼がラン〳〵と輝き出したことであつた。朝夕水垢離をして神に祈禱を献げるのと、家事の手傳の外は讀書に費すのとが彼の日常であつた。

それから暫らくして神主試驗も見事に通つて神主となつた。その後易經を讀み神易判斷をやつてゐたが、その易斷は不思議に適中したと云ふことだ。

昭和八年八月、七十二歳で死んだが彼が青年時代に實際經驗した神隱しの話は人々の間に未だ疑問の謎として語り傳へられてゐる。

（筆者曰　此話は彼の生前の實話である）

（了）

昭和十年一月十四日印刷
昭和十年一月十六日發行

定價參拾五錢

著者　平山無石

發行者　館山北條町長須賀四八番地　米田榮太郎

印刷所　館山北條町二〇一七ノ一　房州新聞社

發行所　館山北條町長須賀四八番地　米田屋書店

1
4